

- ⑫ 小町谷照彦・倉田実編『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院，2011年）118p や角田文衛監修『平安時代史事典』（角川書店，1995年）「近衛中将」項などにあり，古典常識となっている。
- ⑬ “*Cantares de Ise*” 7p
- ⑭ たとえば一例として，九十八段の「おほきおほいもうちぎみ」を，マス訳は *canciller*，マッカー訳は *Chancellor* とする。なお，カベサス訳は初版・2版とも *Primer Ministro*，ソロモノフ訳も *el Primer Ministro*，フランス語版ルノンドー訳は *le Premier ministre*，英語版フォス訳は *the Prime Minister*，英語版ハリス訳は *Grand Prime Minister* としている。
- ⑮ マスやソロモノフを含め，先行する英語やフランス語から，語彙のみそのまま移し替えたように見られるケースがスペイン語版に見られるからといって，訳者の怠慢とはもちろん言えない。先行する他言語の訳語に語彙を合わせることで，すでにスタンダードになっている訳語から逸脱しないようにしようとする訳者の「良心」が働いた可能性は，否定できない。
- ⑯ “*Cantares de Ise*” 11-12p。
- ⑰ アントニオ・カベサス「伊勢物語の構成」『大阪大学 日本学報』第3号，大阪大学文学部 日本学研究室，1984年
- ⑱ Antonio Cabezas “*La Literatura Japonesa*”，Madrid: Hiperión, 1990, 23p や，Javier Martínez Herreros “Antonio Cabezas: maestro y amigo”（講演録『スペイン語世界のことばと文化（2014）』京都外国語大学スペイン語学科編，2015年2月，13-20p）。

- ② 拙稿「スペイン語版『伊勢物語』について」『海外平安文学研究ジャーナル』国文学研究資料館, Vol. 4.0, 2016年3月 (<http://genjiito.org/journals/journal4/>) に、スペイン語版『伊勢物語』3種の書誌紹介がある。
- ③ 福嶋教隆氏「イスパニア語に翻訳された日本文学に関する一考察」(『神戸外大論叢』60-1, 2009年9月, 65-83p), 「Una ojeada a la traducción de la literatura japonesa al español por Antonio Cabezas García (アントニオ・カベサスによる日本文学のスペイン語訳について)」(講演録『スペイン語世界のことばと文化(2014)』京都外国語大学イスパニア語学科編, 2015年2月83-102p), 「日本文学のスペイン語訳についての一試案」(『愛知県立大学文学文化財研究所紀要』1, 2015年3月, 21-40p)
- ④ 英語による初の『伊勢物語』全文翻訳である Frits Vos, *A study of the Ise-monogatari, with the text according to the Den-Teika-hippon, and an annotated translation* (in two volumes), 's-Gravenhage: Mouton & Co, 1957 の「V A short survey of Ise-Monogatari studies 伊勢物語研究の概観」において、訳者フォスは、『伊勢物語』研究史について網羅的に詳述している。古注、旧注、新注あわせて50種の注釈と、近代の鎌田正憲の『考証伊勢物語詳解』や池田亀鑑の『伊勢物語に就きての研究』、新井無二郎の『評釈伊勢物語大成』に言及している。
- ⑤ 翻訳上の訳出困難語彙については、浅川槇子氏「各国語訳『源氏物語』「桐壺」について—スペイン語訳・イタリア語訳を中心に—」および「各国語訳『十帖源氏』「桐壺」について」(『海外平安文学研究ジャーナル』国文学研究資料館, vol. 3.0, 2015年3月 (<http://genjiito.org/journals/journal3/>))。
- ⑥ “*Cantares de Ise*” 11-12p.
- ⑦ 『新スペイン語辞典』(研究社, 1992), 『クラウン西和辞典』(三省堂, 2005), 『スペインハンドブック』(三省堂, 1982「軍隊の階級」442p, 黒田清彦氏執筆)を参考にした。なお、①は辞書によっては「将軍」とも訳される。『スペイン語ハンドブック』では①大将は *Capitán general* と称す。また少将を *General de División* (師団長少将) と *General de Brigada* (旅団長少将) とに分け、⑫軍曹を *Sargento primero* (一等軍曹) と *Sargento* (軍曹) に分ける。さらに①~③を *Oficiales Generales* (将軍), ④~⑥を *Jefes* (佐官), ⑦~⑨を *Oficiales* (尉官), ⑩~⑫を *Suboficiales* (下士官), ⑬~⑮を *Tropa* (兵士) と5クラスに分ける。
- ⑧ 「大将」「中将」などは、十世紀以降は名誉職的になっていたことで知られる。それを現代スペインの「陸軍」の階級で訳出することにより、必要以上に職業軍人風のニュアンスが出すぎ、衛兵というより武力組織の上官であったかのような意味合いが出すぎるのではないかという危惧はある。が、日本の平安時代とは文化軸も時間軸も大きく異なる現代スペイン語話者に、なるべく近似値でその官職の階級イメージを連想できるように伝えるには、陸軍階級の体系を借用するのが一番近いと考えたのであろうと推測される。
- ⑨ 和田英松著・所功校訂『新訂官職要解』(講談社学術文庫, 1983年), 『国史大辞典』「衛府」「近衛府」(笹山晴生氏執筆)など。
- ⑩ Antonio Cabezas “*Cantares de Ise*” 24p. 訳出にあたり、田沼理恵氏よりご教示を得た。記して謝意を申し上げる。
- ⑪ ただし、武官の相当位は何度か変遷しており、カベサスの訳語は厳密に「業平の時代」の位階を反映しているとはいええない。カベサスはおそらく「官位相当表」のような資料を参照しているのではないかと思われる。

※【表1】で使用した資料は以下の通り：

[スペイン語版]

- Cabezas García, Antonio (カベサス) : *Cantares de Ise (Ise Monogatari)*, Madrid: Hiperión, 1st: 1979 (初版, 同志社大学地域文化グローバル学部烏丸書庫蔵)
- Cabezas García, Antonio (カベサス) : *Cantares de Ise (Ise Monogatari)*, Madrid: Hiperión, 2ed: 1988 (2版, 雨野蔵)
- Solomonoff, Jorge N. (ソロモノフ) : *Cuentos de Ise (Ise Monogatari)*, Barcelona: Paidós, 1980
- Mas López, Jordi (マス) : *Cuentos de Ise*, Madrid: Trotta, 2010

[英語版]

- Vos, Frits (フォス) : *A study of the Ise-monogatari, with the text according to the Den-Teika-hippon, and an annotated translation (in two volumes)*, 's-Gravenhage: Mouton & Co., 1957
- McCullough, Helen Craig (マツカラー) : *Tales of Ise, Lyrical Episodes from Tenth-Century Japan*, Tokyo: University of Tokyo Press, 1968
- Harris, Henry Jay (ハリス) : *The Tales of Ise, translated from the classical Japanese*, Rutland, Vt.: Charles E. Tuttle Company, 1972

[フランス語版]

- Renondeau, Gaston (ルノンドー) : *Contes d'Ise*, [Paris]: Gallimard, 1969

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金「基盤研究A 海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的研究」(代表研究者：伊藤鉄也氏)研究会(2016年6月18日)および慶應義塾大学野沢セミナー(2016年8月7日)における口頭発表の一部を基にしている。発表の席上で貴重なご教示を頂いた方々に、お礼を申し上げます。

注

- ① カベサスの残した記述に、大島正氏の名前がしばしば見られることから、大島氏は、カベサスの日本古典文学享受の上でキーとなった人物の一人であると考えられる。たとえば Antonio Cabezas *“Un Puñado de Arena (一握の砂, 石川啄木)”*, Madrid: Hiperión, 1976 の序の末尾 14p の「謝辞」や、カベサスによる日本文学史についての著作である *“La literatura japonesa”*, Madrid: Hiperión, 1990, 28-29p など大島氏についての言及がある。また、同志社大学蔵 *“Cantares de Ise”* のみならず *“Manioshu”* にも、直筆で書かれた、カベサスから大島氏への献辞が見られる。同志社大学蔵本については、拙稿「スペイン語版・英語版・フランス語版『伊勢物語』7種における官職名の訳語対照表」『海外文学研究ジャーナル』国文学研究資料館, Vol. 5.0, 2016年9月 (<http://genjiito.org/journals/journal5/>)。

ハリスの語彙からも離れ、先行する翻訳のどれと比較しても独自である。カベサスは、英語やフランス語の翻訳を先行研究として取り入れながらも、語彙を取捨選択し、検証していると思われる。ここでは「衛府」の「佐」のランクもスペイン陸軍の階級の枠組みの中で表現する方針をとり、独自の訳出を行ったと考えられる。翻訳とは多かれ少なかれ異文化を伝えるという啓蒙的性格を持つものだが、カベサスの訳はとりわけ、日本の歴史的背景まで訳語の中で伝えようとする啓蒙的性格が強いといえる。

五、まとめ

本稿の前半では、古典特有語である官職名のうち、「中将」「大将」など衛府官人の訳語について、スペイン語版3種を比較し、カベサスの訳語の特徴を見出した。カベサス訳は、平安時代の六衛府の序列の特徴（近衛府のほうが、兵衛府・衛門府より、官職の相当位が上格であったことなど）に即して、武官の官職名を、現代スペイン陸軍の階級体系を借用しながら、相対的に訳し分けている。それにより、読者が平安文学を理解する上で必要な歴史背景でもある官職名のイメージの差を、体系面から訳出している点が特徴である。また、本稿後半では、訳語の背景として、先行する他言語による翻訳版からの享受の一面があることを述べ、直訳とされる翻訳版であっても、またカベサスのようにスペイン語初とされる翻訳であっても、他の言語による『伊勢物語』翻訳語彙が媒介していることがある点に言及した。

カベサスの、武官の体系にまで配慮した訳語のあり方は、古典文学の歴史背景までを読者に伝えようとする意志の反映と思われる。「大将」「中将」の訳語に代表されるように、本文の背景となる武官の制度までを理解し、それを現代スペイン文化に置き換えて伝えようとする姿勢は、むしろ有職故実の知識を共有している国文学研究者側からこそ、見えやすい側面でもある。この翻訳を刊行した当時、日本に長期在住していたカベサスが心を痛めたのは、自国スペインから届いたいわれなき批判であった¹⁸ようだが、日本の歴史文化に即してスペイン語圏に伝えようとする翻訳姿勢や独自の工夫は、日本の研究者側からこそ、再検討あるいは再評価がなされても良いのではないか。

このように、訳語を検討するにあたっては、翻訳者が翻訳語を選択するに至った翻訳者の思考の背景を、日本文学研究側からも探る必要がある。今後は、さらにほかの語彙から訳語選択の背景を探りたい。

マッカーラーのこの原理を確認した上で、マスの訳語を見ると、やはりマスも、「大将」は capitán とし、「中将」ではそれに sub を付けた subcapitán としている。また「衛府の督」「兵衛の督」ではマッカーラーの語彙と近い comandante である。「佐」の訳出方法はマッカーラーとやや異なるが、sub という接頭辞を付けて表現するシステムにおいて、マッカーラーと類似する。このようにマスの訳語は、先行するマッカーラーと、訳出の原理上で共通性が見られる。今回は取り上げないが、マスとマッカーラーの語彙的な共通性は、武官以外の言葉においても散見される^⑭。マスの訳には、マッカーラー訳から影響を受けている面があると考えてよいと思われる^⑮。

ここで同様に、カベサスの訳語のほうも、先行する英語版と比較して考察したい。すると、カベサスにおいては、【表1】の1～2の general、3～6の coronel、9と11の capitán においては、英語版ハリス訳の語彙と共通性が強いことがわかる。スペイン語の中だけで比較すると、一見、特異にも見えるカベサス訳の訳語だが、先行する『伊勢物語』翻訳群から孤立しているわけではないのである。カベサスの訳語は、ハリス訳から学んだと想像される語彙がほかにも複数含まれる。たとえば表外の例を挙げると、「宮内卿」（八十七段）のカベサスの訳語も、スペイン語3種の中においては特異に見えるが、ハリス訳と語彙が共通する。ソロモノフとマスが共に el ministro de la Casa Imperial と訳出したのに比して、カベサス訳は el chambelán としており、一見、カベサスが突出しているように見える。しかしソロモノフとマスの発想は、フォス訳およびマッカーラー訳 Minister of the Imperial Household に近い一方、カベサスの chambelán という語彙の発想は、ハリスの chamberlain に近い。なお、カベサス訳は、ハリスから「のみ」ならず、フォスやマッカーラーからの影響と読み取れる点も見られる。

先述したように、カベサスは“*Cantares de Ise*”序文において、翻訳にあたって先行する英語版とフランス語版の『伊勢物語』を自身で参照したと述べている^⑯。また、カベサスによる論文「伊勢物語の構成」^⑰においても、先行するハリス、フォス、マッカーラーに触れている。つまり、カベサスが先行する翻訳版を見ているのは、確実である。

スペイン語翻訳をそれぞれ単体で見ただけでは分かり得ないが、このように、スペイン語の翻訳版は、たとえばカベサスやマスのような原文からの「直訳」であっても、先行する翻訳版からの語彙の影響は無視できない。むしろ、直訳とうたっている、他言語間で連関し合い共有されている『伊勢物語』の情報の輪から孤立しているわけではない。かつ、カベサス訳のような「初」のスペイン語翻訳も、先行する他の言語の翻訳を参照して研究している。

ただし、「衛府の佐」（【表1】の8）でカベサスが用いた alféreces という陸軍用語は、

で、『伊勢物語』の主人公について、「Garcilaso のように、この主人公は武官であり詩人、日本文学の中でもっとも偉大な詩人である（雨野直訳¹³）」と解説しており、スペイン・ルネサンスの、名門貴族出身の代表的叙情詩人であり、また皇帝に仕える騎士でもあった Garcilaso de la Vega を引き合いに出している。ここからは、カベサスが、自国スペインの文学史を基点とし、その枠組みを下敷きにしなが、業平像を照射し、また業平の日本文学史上の意義をスペイン語版読者に啓蒙的に伝えようとする面が読み取れる。官職名の訳においてスペイン陸軍の体系を借用したのと同様、業平像においても、スペインの文学史の中に置き換えて提示しようとしているのである。「武官であり詩人」という業平像は、カベサスが訳出の際に「武官」の地位を細密に訳し分けた理由ともつながっていると想像される。

四、先行するフランス語版・英語版との共通点

ここまで、スペイン語3種の官職名を、武官の体系に着目して比較し、平安時代の歴史的背景をカベサスがどのように再現しようとしたか、その特徴を取り上げた。ところでこのようにカベサス訳を見てくると、ソロモノフ訳、マス訳の訳語は、どのような背景によって語彙選択がなされているのか、という疑問がわく。この点について、考察したい。

ここで、【表1】に戻り、スペイン語訳に先行する英語訳・フランス語訳にまで遡って、訳語を検証する。すると、重訳であるソロモノフ訳が、ルノンドー訳フランス語と語彙面で共通あるいは類似するのは当然として、マス訳では、英語版マッカーレー訳の語彙と、多くの共通性があることに気付く。以下にその例を具体的に挙げる。

【表1】のソロモノフ訳の列と、ルノンドー訳の列をご覧頂きたい。まず、ソロモノフの訳語 *general* はルノンドー訳の *général* から、*comandante* はルノンドーの *commandant* から、*mayores* は *majors* から、*coronel* は *colonel* からというように、ソロモノフ訳は原則として、ルノンドーのフランス語に即してスペイン語に移したものと考えられる。

一方、日本語原文からの直訳とうたうマス訳であるが、こちらは英語版マッカーレー訳と共通する原理が見られる。すなわち、マッカーレーは、「大将」を *Captain* とし、「中将」ではそれに *middle* を付けて *Middle Captain* とする体系をもっている（【表1】の1～6参照）。「衛府の督」「兵衛の督」では *Commander* とし、「佐」の場合はそれに *Assistant* を付け加える（【表1】8～11）ことで表現するという原理で、統一的に表現されているようである。

- 中将 (63) general ①
 (79) general ①
 (97) comandante de la guardia ⑥
 (99) comandante de la guardia ⑥
 衛府の督 (87) coronel de la Guardia ④
 左兵衛の督 (101) coronel de la Guardia Militar de la Izquierda ④
 衛府の佐 (87) mayores de la Guardia

たとえば、『伊勢物語』の「大将」に①general（陸軍大将）をあてるのは77段、78段ともに共通するが、「中将」の訳語でも再び①general（陸軍大将）が存在する一方で、⑥comandante（陸軍少佐）も存在しているというように、①と⑥の2系統が混在しており、一貫していない。また、「中将」の半数に⑥comandante（陸軍少佐）をあてるが、実際にはこの「中将」よりも位階では同等か下のはずの「衛府の督（87段）」に④coronel de la Guardia（陸軍大佐）を、またやはり「兵衛の督（101段）」にも同様に④（陸軍大佐）があてられて、⑥と④の間で上下が逆転している。このように、ソロモノフの訳語は一貫性に欠け、また上下の関係においても平安時代の官職を相対的・体系的に伝えたものとはなっていない。

三. 小 結

ソロモノフの訳語は、前述したように、フランス語のルノンドー訳を底本とした「重訳」であり、その訳語選択は、ルノンドー訳に由来する。よって、ソロモノフの訳語の体系の矛盾は、ソロモノフ自身の罪ではない。とはいえ、「大将」「中将」「兵衛の督」「衛府の督」「衛府の佐」などといった訳語を総合的に見る限り、結果的に、「スペイン語版3種とも、衛府官人の官職名の訳語としてスペイン陸軍の語彙を用いる点は同じであるが、3種のうち、平安時代の官位の体系に照らしてもっとも穏当な訳語は、カベサスのものである」、ということになる。

このように、カベサスによる武官の訳語は、作品内で官職名が揺れることなく一貫している点、またスペイン陸軍の階級名称を借りながらも、日本の有職故実の研究成果を反映して近衛上位の特質まで訳出されている点が特徴である。このことは、「大将」「中将」など一語一語の訳語を見る限りでは一見ではわかりにくいのが、官職の訳語を、衛府全体に渡って抽出し、体系的に基づいて整理しなおすと見えてくる。

なお、官職名は平安文学理解の中で重要であるだけでなく、カベサスは、主人公についての解説でも武官という属性に言及している。カベサスは“*Cantares de Ise*”の序文

であろう。

二-二、マス訳の場合

ここで、カベサス訳との比較のために、カベサス訳よりも30年以上後の2010年に刊行された、最も新しいスペイン語版であるマス訳を見ていきたい。

右大将	(77) capitán de la Derecha ⑦
	(78) capitán de la Derecha ⑦
中将	(63) 官職ナシ Ariwara no Narihira
	(79) Subcapitán * subcapitán は辞書にナシ (capitán = 陸軍大尉)
	(97) subcapitán de la Guardia
	(99) subcapitán de la Guardia
衛府の督	(87) comandante de la guardia ⑥
左兵衛の督	(101) comandante de la Guardia Militar de la Izquierda ⑥
衛府の佐	(87) suboficiales de la Guardia

マスも、カベサス同様に陸軍の階級名称を武官の訳語に適用している。しかしながら、「大将」・「中将」のイメージはどういうわけか低く、「右大将」の訳語として、スペイン陸軍の⑦（陸軍大尉）をあてている。そして「中将」の訳語には、本来のスペイン陸軍の体系には存在しないようだが、陸軍大尉（⑦）という語に sub という接頭辞をつけることで⑦よりさらに下位であることをイメージさせる「副大尉」とでもいえるような訳語をあてている。

また、「衛府の督」・「左兵衛の督」・「衛府の佐」に対する訳語には無頓着さが感じられ、87段の「衛府の督」や101段の「左兵衛の督」にスペインの⑥（陸軍少佐）をあてているために、「右大将」の訳語である⑦（陸軍大尉）との間で上下関係が逆転している。平安時代の官職のイメージをスペイン語話者に伝えるには、矛盾が認められるといわざるを得ない。

二-三、ソロモノフ訳の場合

一方、ソロモノフ訳のほうも、カベサス同様に陸軍の階級を用いて武官の名称を訳出する。しかし、同じ名称同士において訳語が一貫しない、あるいは本来別のはずの名称に同じ訳語をあてているなど、混乱が生じている。

右大将	(77) general de la Guardia de la Derecha ①
	(78) general de la Guardia de la Derecha ①

については双方共にスペインの⑦ capitán（陸軍大尉）をあてて訳出している。また、「衛府の佐」には、⑨ alférez（陸軍少尉）があてられている。丸番号を見ていくと、上から、①→④→⑦→⑨となり、平安時代の衛府の官職名が、体系的に上下矛盾なく訳されていることがわかる。^⑧

ところで、このカベサスの訳語は、平安時代当時の貴族にとって一生の関心事であった「位階の上下」を相対的に訳出するのみならず、六衛府の中での「近衛の上位性」をも表している。周知のとおり、歴史学の知見により、弘仁二年（811）には左右近衛府・左右衛門府・左右兵衛府からなる六衛府制が成立したが、中でも「近衛」が内裏閤門以内を守衛する最も重要な武官とされ、内裏守衛の任務をもつ近衛府の地位が高まり、位階の上でも近衛府が外衛より上位に位置づけられていたことが、すでに知られる。^⑨

その仕組みを、カベサスは理解した上で訳語に反映させている。カベサスの訳語において、「近衛」の長官（大将）を①とし、「近衛」の次官（中将）を④と訳されたらば、[兵衛の督]が、①④より下の⑦と訳し分けられているのは、偶然ではなく意図的なものと思われる。なぜならカベサスは、“*Cantares de Ise*”冒頭の「PRESENTACION」において平安時代の文化背景を解説しているが、「2. La sociedad japonesa del siglo IX（9世紀の日本社会）」の中で、平安時代の武官の体系について以下のように説明しているからである。

「武官は3団体、すなわち近衛府・兵衛府・衛門府に分かれていた。これらの団体のそれぞれが同時に、右と左の2師団に分かれていた。近衛においては、上級の地位は Comandante, Coronel, General の身分であった。その他の2つの団体では、最高の地位は Alférez, Capitán の身分であった。（雨野による直訳）」^⑩
すなわちカベサスは、同じ衛府官人であっても、近衛と、兵衛・衛門では身分のランクつまり相当位が異なる体系を理解し、意図的に官職名の訳し分けを行っている。

このような、衛府の中での序列や、近衛府とほかとの間にある相当位の差異は、現代日本人の読者にとってもわかりにくい点である。が、平安時代の文学は、人物名が官職名で表されることも多く、人物のイメージ造形や、他の登場人物との相対関係が官職名と密接に結びついている。カベサスは、この近衛府上位のイメージを、近衛とそれ以外にあてる陸軍階級に差をつけることでクリアし、スペイン陸軍の階級という一つの体系のもとで順位づけなおしている。「兵衛佐（衛門佐）」→「近衛少将」→「近衛中将」というように、兵衛（衛門）から近衛へと昇るのが典型的な出世コースであった^⑪ことを考え合わせても、近衛と、兵衛・衛門との間に存在したランクの差を、スペイン陸軍の階級体系を借用しながらいわば可視化して訳出してみせたカベサスの手法は、特筆すべき

用いられる語彙である。以下に、スペインの陸軍の階級名称^⑦を挙げる（便宜上、上から順に通し番号として①②③④…と○番号を付した）。

- ① general 大将（辞書によっては「將軍」）
- ② teniente general 中將
- ③ general de división 少將
- ④ coronel 大佐
- ⑤ teniente coronel 中佐
- ⑥ comandante 少佐
- ⑦ capitán 大尉
- ⑧ teniente 中尉
- ⑨ alférez 少尉
- ⑩ subteniente 准尉
- ⑪ brigada 曹長
- ⑫ sargento 軍曹
- ⑬ cabo primero 伍長
- ⑭ cabo 兵長
- ⑮ soldado 兵

一方、以下に掲出するのは、【表 1】に抽出した、カベサス訳『伊勢物語』における武官の訳語を、「位階の高い順」に抜き出して整理したものである（『伊勢物語』の段数は、（ ）内に示した。末尾の①、④などの番号は、前述の陸軍の階級名称に付した通し番号と一致させた）。

- 右大将 (77) General de la Guardia de Palacio, División Derecha ①
- (78) general ①
- 中將 (63) coronel ④
- (79) coronel ④
- (97) coronel ④
- (99) coronel ④
- 衛府の督 (87) capitán del Ejército ⑦
- 左兵衛の督 (101) capitán del Ejército ⑦
- 衛府の佐 (87) alféreces del Ejército ⑨

カベサスは、まず近衛府の「大将」には、スペイン陸軍でいう①つまり general（陸軍大将）をあて、「中將」には④ coronel（陸軍大佐）をあて、「衛府の督」・「兵衛の督」

スペイン語版 Solomonoff 1980	スペイン語版 Mas 2010	英語版 Vos 1957	英語版 McCullough 1968	英語版 Harris 1972	フランス語版 Renondeau 1969
el general de la Guardia de la Derecha	capitán de la Derecha	the Major Captain of the Inner Palace Guards, Right Division	the Captain of the Right	the General of the Right	le général de la Garde de droite
el general de la Guardia de la Derecha	capitán de la Derecha	the Major Captain of the Inner Palace Guards, Right Division	a Captain of the Right	General of the Right	le général de la Garde de droite
el general Zaigo	官職ナシ（人名のみ, Ariwara no Narihira）	the Middle Captain Zaigo	官職ナシ（人名のみ）	Colonel Zaigo	général Zaigo
general	Subcapitán	the Middle Captain	the Middle Captain	the Colonel	général
comandante de la guardia	un subcapitán de la Guardia	a Middle Captain	Middle Captain	Colonel	commandant dans la Garde
comandante de la guardia	un subcapitán de la Guardia	a Middle Captain	a certain Middle Captain	the Colonel	commandant dans la garde
la guardia	la guardia imperial	the Headquarters of the Inner Palace Guards	Imperial Guards (officer)	the Guard of the Inner Palace	la garde
los mayores de la Guardia	suboficiales de la Guardia	Assistant Captains of the Headquarters of the Guards	certain Assistant Guards Commanders	the Palace Guards	majors de la Garde
coronel de la Guardia	該当訳文ナシ	a Captain of the Headquarters of the Guards	a Guards Commander	Captain of the Guard	colonel dans la Garde
el coronel de la Guardia	el comandante de la guardia	That Captain of the Headquarters of the Guards	the Guards Commander	that Captain of the Guard	le colonel de la Garde
un coronel de la Guardia Militar de la Izquierda	un comandante de la Guardia Militar de la Izquierda	Captain of the headquarters of the Military Guards, Left Division	the Commander of the Military Guards of the Left	Captain of the Right (Left の誤りか) Division of the Military Guard	un colonel de la Garde militaire de gauche

【表1】

通し 番号	官職	所属	『伊勢物 語』段数	『伊勢物語』本文（新編全集）	スペイン語版 Cabezas 2版 1988	Cabezas 初版 (1979)と2版 の異同
1	右大将	近衛府	77	木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動きいでたるやうになむ見えける。それを、右大将にいまそがりける藤原の常行と申すいまそがりて、	General de la Guardia de Palacio, División Derecha	同じ
2	右大将	近衛府	78	むかし、多賀幾子と申す女御おはしましけり。うせたまひて、七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大将藤原の常行といふ人いまそがりけり。	el general	同じ
3	中将	近衛府	63	いかでこの在五中将にあはせてしがなと思ふ心あり。	el coronel Zaigo	同じ
4	中将	近衛府	79	これは貞数の親王、時の人、中将の子となむいひける。	el coronel	同じ
5	中将	近衛府	97	むかし、堀河のおほいもうちぎみと申す、いまそがりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、中将なりけるおきな、	un coronel	同じ
6	中将	近衛府	99	むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の、下簾よりほのかに見えければ、中将なりける男のよみてやりける。	coronel	同じ
7	近衛府	近衛府	76	二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛府にさぶらひけるおきな、人人の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみて奉りける。	la Guardia de Palacio	同じ
8	衛府の佐	六衛府	87	それをたよりにて、衛府の子ども集り来にけり。	alféreces del Ejército	同じ
9	衛府の督	六衛府	87	この男のこのかみも衛府の督なりけり。	capitán del Ejército	同じ
10	衛府の督	六衛府	87	かの衛府の督まづよむ。	官職名ナシ	同じ
11	左兵衛の督	兵衛府	101	むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。	capitán del Ejército	同じ

カベサス訳、ソロモノフ訳、マス訳の3種を並べて対照させた。カベサス訳とマス訳は、底本はわからないものの、日本語からの「直訳」であるとしている。一方、ソロモノフ訳は、底本をフランス語のルノンドー訳とした「重訳」である。参考として、表の一番右に、そのルノンドーによるフランス語訳の語彙も示した。さらに、カベサス訳初版(1979年)に先行する英語版3種、すなわちフォス、マッカーラー、ハリスの英語訳も併記した。

『伊勢物語』翻訳史上、カベサス訳に先行するものには、ロシア語版とドイツ語版も存在する。しかしながら、“*Cantares de Ise*”序文において、カベサス自身が、ロシア語とドイツ語は理解できない(そのため他から助力を得た)こと、翻訳にあたり先行するフランス語版と英語版は綿密に研究したことを述べている^⑥。よって、本稿でカベサス訳への享受を考察するにあたり、「カベサスに先行する翻訳」の検討対象は、英語版およびフランス語版に絞った。検討した翻訳の書誌情報は、本稿末尾に列記した。

なお、【表1】中のカベサス訳は、「2版」を挙げたが、「初版」との版異同についても示した。というのも、「初版」(同志社大学蔵本、1979年)、「2版」(雨野蔵書、1988年)、「4版」(市ヶ谷のセルバンテス文化センター東京蔵本、2009年)の訳文本文を照合したところ、「2版」で和歌の訳がまるまる差し替えられている箇所があるなど、初版と2版の間で訳文が大きく改稿されていることが判明したためである。今回取り上げた範囲内では異同はないが、今後カベサス訳の研究では、カベサスが訳語に大きく手を加えていることを考慮し、版異同にも注意する必要があると思われる。なお本稿内での表以外の注や引用は、2版から引いた。

ソロモノフ訳、マス訳は、「国会図書館の蔵本」を用いた。

二-一、カベサス訳の場合

【表1】でわかるように、「大将」「中将」をはじめとする衛府の官職の訳語を見比べると、スペイン語版の訳語は、同じ官職であっても訳者によって選ばれる語彙がそれぞれに異なっている。つまり、同じ官職でもスペイン語話者に想起される語彙は共通しないということになる。が、結論から述べるならば、古典の有職故実の視点から見て、平安時代の歴史背景、すなわち律令の体系面を重視する場合、カベサスの訳出方法には優れた工夫があり、穏当である。以下、訳語をそれぞれ見ていく。

カベサスの訳語では、通し番号1・2に見られるように、大将=el general、通し番号3~6に見られるように、中将=coronel という訳語で一貫している。

このような general や coronel といった語彙は、現代スペインでは「陸軍」の階級で

る。本文研究の観点から、『伊勢物語』翻訳者の作品解釈を逆照射したり、有職故実など当時の文化的背景の観点から、スペイン語翻訳における歴史背景の反映のされ方を検証したりすることは、今後の日本古典研究にも、スペイン語翻訳にも意味があるうし、日本古典文学研究側から貢献できる面も少なからず有るのではないかと考える。また、『伊勢物語』受容史の観点からも、各翻訳書における原文理解のありようは、検討すべき課題であると言えよう。さらに、ヨーロッパにおける『伊勢物語』翻訳は、日本の外だけで孤立的に行われた営為ではなく、日本における『伊勢物語』本文研究史が織り込まれてきた歴史がある^④。後で述べるように、一つの言語の翻訳は、また次になされた別の言語の翻訳作業に影響を与えているようであり、もはや日本語、英語、スペイン語、フランス語などといった一言語で考えていると見えてこない、言語間の享受関係がある。日本の『伊勢物語』研究が、どのような面で、いかなる形で海外で受け止められたか、それがまた言語をまたいでどのように展開していったかという問題とも、つながっていると推察される。

そこで、まずは基礎的研究の第一歩として、現在見られる3種のスペイン語版『伊勢物語』の訳語を比較考察する。また、特にカベサスによる訳語選択に着目し、それに先行する英語版、フランス語版とも対照してカベサス訳の特徴を検討する。国文学の側から、カベサスの『伊勢物語』享受の姿勢や、個々の翻訳の位相を、作品の翻訳群全体の中に位置づけることまで視野に入れて考察したい。

二、翻訳語の比較

本稿で取り上げるのは、『伊勢物語』に出現する官職名のうち、「大将（七十七段・七十八段）」「中将（六十三段・七十九段・九十七段・九十九段）」「衛府の督（八十七段）」「左兵衛の督（百一段）」「衛府の佐（八十七段）」および「近衛府」（七十六段）である。なお、「少将」という語は『伊勢物語』本文に出現しないので、今回は考察対象としない。

官職名は、一般に翻訳において訳出が難しい古典特有語とされる^⑤。が、『伊勢物語』は、「在五中将の日記」などと呼ばれてきたことが知られ、本文中にも主人公の名として「在五中将」の名が見えることから、他の作品に比べ、「中将」など官職名の訳語にはそれなりの注意が払われていてもおかしくないと予測できる。よって、数ある平安文学の中でも、『伊勢物語』は官職名の訳語を検討する材料になり得ると考えた。

スペイン語版3種の訳語を比較したのが、【表1】である。表の一番左は通し番号、本文（『伊勢物語』原文）には新編全集を用いた。スペイン語訳語は、初版が出た順に

スペイン語版『伊勢物語』における Antonio Cabezas 訳の特徴

——「中将」「大将」など武官の官職名を端緒に——

雨 野 弥 生

一、研究状況と本稿の目的

Antonio Cabezas Garcíaによる“*Cantares de Ise*”は、『伊勢物語』のスペイン語版(全文翻訳)として、最初のものである。初版は1979年(昭和54)に出されている。この訳者を、本稿では「カベサス」と呼び、その翻訳を「カベサス訳」とする。国立情報学研究所のCinii Booksによれば、カベサス訳の「2版」は国内でも比較的多くの大学に所蔵されているようだが、「初版」の国内大学所蔵は3冊のみ(2016年9月現在)であり、うち1冊は、同志社大学グローバル地域文化学部烏丸書庫に所蔵されている。この同志社大学蔵『伊勢物語』初版は、「大島正氏寄贈」との印が押され、大島氏宛ての献辞と訳者カベサス直筆のサインとがペン書きされており、カベサスから同志社大学教員であった大島正氏への献呈本と見られる^①。本稿では、このカベサス訳をはじめとする、スペイン語版『伊勢物語』3種^②について取り上げたい。

スペイン語版『伊勢物語』については、ごく近年、スペイン語学の立場から、福寫教隆氏による言及がある^③。福寫氏は、スペイン語による日本文学翻訳例を複数取り上げられ、カベサス訳についても語彙面などから考察されている。また、カベサスが訳出上で試みた和歌の修辞技巧面の工夫、すなわち九段の「から衣きつつなれにしましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」歌における折句について、カベサスがスペイン語5行詩の行頭にLYRYO(=lirio, カキツバタ)を入れた「折句」で表現した点を、評価しておられる。

しかしながら、国文学側からカベサス訳に言及した研究というと、福寫氏の前にも後にも無いようである。言葉の壁ゆえやむを得ないが、管見の限り、カベサス訳をはじめとする『伊勢物語』スペイン語翻訳版は、日本の古典研究者からは全く関心が払われてこなかった。

とはいえ、『伊勢物語』は日本古典研究史の中でも、中世以来の蓄積がある作品であ